複合語「名詞＋名詞」型の分類

中　屋　　晃
Akira NAKAYA

目次

１．はじめに
２．Jespersenによる分類
３．Quirk, *et al.*による分類
４．N1が複数形となる例
５．N1が属格形となる例
６．まとめ

［Abstract］
Classification of English Noun-Noun Compounds

This paper examines how English compound nouns can be classified based on the relationships between the first and the second element of compounds. Those relationships can be rather ambiguous and obscure when neither of the two elements performs a verbal function. The types of compounds dealt with here are mostly verbless, which leads to a wide variety of noun-noun combination patterns. The first classification introduced here is based on *A Modern English Grammar on Historical Principles* by Jespersen(1942), and the second one on *A Grammar of Contemporary English* by Quirk, *et al.*(1972). The first element in N+N-compounds should be neutral without any inflectional ending, but there are cases in which the plural inflection "-s" is attached to the first element. Some examples of irregular noun-noun compounds are given in this regard. Finally, the focus is shifted toward genitive compounds. Despite some limitations, the classification methods mentioned in the two grammars are effective in understanding the concepts of N+N-compounds.

１．はじめに

語形成の知識として重要なものに複合語がある。複合語にはいくつかのタイプがあり，何に焦点を当てるかによって分類方法も異なってくる。本論では「名詞＋名詞」の複合語を取り上げ，この型の複合語の分類について論じる。ここでは便宜上，「名詞＋名詞」を「N1＋N2」と表記する。N1は名詞で複合語の第１要素となるものを，N2は複合語の主要部を構成することが多い第２要素の名詞を指す。なお，いわゆる複合名詞（compound noun）と呼ばれるものには，第１要素に名詞以外の，形容詞，動詞的要素，副詞的小辞などを取るものが含まれることに留意したい。

英語の辞書を見ると分かるのだが，見た目には一語として表記されている複合語が多い。これは複合語として確立する過程に関係しており，元は二語に分かれていたものがハイフンで結ばれ，ついには一語として認識されるという複合語の成熟までの歴史的経緯が背景となっている。表記について言えば，cell pnone，cell-phone，cellphoneとかair line，air-line，airlineなど３通りの書き方が混在する時期もある。なお，ハイフンを入れる場合は，air-raid shelter（防空壕）のair-raidのように形容詞の限定用法として使うことが多い。一方，本来は二語であったものが表記上一語になったものの中には，語源の知識がないと，どう考

キーワード：複合語，複合名詞，イェスペルセン
Key words: N+N-compounds, Classification of Compound Nouns, Jespersen

えても複合語には思われないものもある。例えば，lord（“loaf-keeper”を意味する古英語に由来）が複合語だと認識する人は今日ではほとんどいない。この語から見えてくるのは，「パンを管理する人」がすなわち「君主」ということだ。また，ladyは“loaf kneader”を意味する古英語に由来し，「パンをこねる人」が転じて「女性」となった複合語である。これらの事実は語源情報がなければ確認のしようがない。では，womanについてはどうであろうか。これは古英語“wifman”に由来するもので，wifは女性（female）を，manは人間（human being）を意味する。余談となるが，本来manとは獣（brute）と対比した人間のことだとする俗説（OED参照）があることからも分かるように，男女を区別する語は別途あり，古英語ではwerが男性を，wifが女性を示していた。そうであれば，第２要素の「man」からwomanが複合語であることが比較的理解しやすいと思われる。いずれにせよ，複数の語あるいは語基（base）が結びついて辞書で独立した見出しとして記載されている「N1＋N2」の合成語は，ほぼ複合語として定着していると言えそうである。

辞書の見出しにはアクセント記号が付いており，これが複合語を見分けるのに有効な判断材料となる。多くの複合語では，第１要素に第１アクセントの記号が，第２要素に第２アクセントの記号が付いている。これは複合語アクセント（compound accent）と呼ばれる現象で「N1＋N2」型の複合語によく見られる。例えば，sea bank（防潮壁），land mine（地雷），computer crime（コンピューター犯罪）などである。ただし，これは複合語を特徴付ける絶対的な基準ではなく，bone china（骨灰磁器），bottom dollar（なけなしの金），city council（市議会），season ticket（定期入場券）などのようにN1とN2の両方が第１アクセントを持つ例も見られる。結局のところ，複合語であれば第１アクセント（主強勢）が修飾語となる第１要素に，第２アクセント（副強勢）が主要語となる第２要素に置かれるとは残念ながら断言できないのである。

実は，複合語を成立させる基準が何であるかは不明確で，一般化できる複合語の定義は存在しない。例えば，複合語の構成要素の間には他の要素は介入できないとする「不可分離性」を基準にするのはどうであろうか。次の例では，構成要素で修飾語となるN1に屈折語尾は付けない。なお，アステリスク（*）は非文法的な例であることを示す。

(1) armchair（肘掛け椅子）　*armschair
　flowerbed（花壇）　*flowersbed
　flower shop（花屋）　*flowers shop

不可分離性は有効な基準に思えるが，複数を示す屈折語尾については次の様な例外もある。

(2) foot-warmer（足温器）　cf. feet-warmer
　pantsuit（パンツスーツ）　cf. pants suit
　munition factory（軍需工場）
　　cf. munitions factory
　resource room（資料室）
　　cf. resources room
　system operator（システム管理者）
　　cf. systems operator

次に，Downing & Locke（2006）が挙げている複合名詞では別の構成要素による並列配置や修飾を認めないとする基準について見てみよう。

silkworm（蚕）
　*silk and earth worms
　*pure silkworm
painkiller（鎮痛剤）
　*pain and insect killers
　*persistent painkiller

これらの例は一語であることからも分かるように結束レベルの高い複合語で，それが並列配置では分離され別の要素を入れること自体不自然である。例えば，pesticide and painkillerとすれば自然な並列配置となる。また，修飾の基準については追加する別の要素が第１要素を修飾できないという限定がなく，large silkwormのように主要部を修飾すれば表現として問題は生じないことになってしまう。

Levi（1978）は複合名詞という概念の存在自体を無意味なものであるとして，以下の複合語の基準をすべて否定している。

（1）第１要素に第１アクセントが来る強勢パターンを取る。
（2）恒久相（permanent aspect）を含む。
（3）要素の相互関係から生じる特殊化した意味を持つ。

（1）が有効でないことについてはすでに触れてあるが，（2）の恒久相については例えばheart attack（心臓発作）ではattackは１回限りのもので恒久的なものではないことから問題点を指摘している。（3）の基準については，例えばstone wall（石垣）やwoman doctor（女医）には意味の特殊化は見られないことから不適切だとしている。これらの点については山田（1985）が詳しい。

以上から言えるのは，何を基準にするかにより，対象とする複合語の範囲も分類方法も異なってくるということだ。本論では科学的伝統文法（scientific traditional grammar）を代表するJespersen（1942）による分類と，変形文法全盛時代に記述文法（descriptive grammar）を発展させたQuirk, *et al.*（1972）の分類について触れ，複合語の不可分離性で問題となる複数形のN1と属格のN1について用例を紹介することにする。

２．Jespersenによる分類

英文法史上の最高傑作のひとつとされているのがデンマークの英語学者Otto Jespersenによる文法書*A Modern English Grammar*である。これは第１巻から第７巻まである著作で，多くの用例を使って実証的に英文法を解説している。第６巻は形態論（morphology）だけを扱ったもので，「N1＋N2」型の複合語について先駆的な分類を試みている。具体的には，以下の６つのタイプに分類している。なお，文法用語としてはJespersen（1942）ではnoun（名詞）ではなく，substantive（実詞）が用いられている。

（１）N2がN1により修飾されるもの
例）casebook（判例集）
flower garden（花畑）
horse race（競馬）
wineglass（ワイングラス）

このタイプの複合語は極めて多く，必要に応じて今後ますます増えるとJespersenは述べている。「主要語となるN2」と「限定詞となるN1」の論理的な関係は無数にあり，それら全てを分類することは不可能である。Jespersenは複合語の増加傾向を示す一例として，air-で始まる用語が多く見られるようになったと指摘し，air-base, aircraft, airfleet, airforce, air-line, air-liner, air-mail, air-pilot, air-port, air-raidを挙げている。これらの中で，air-line, air-liner, air-mail, air-portは今日ではハイフンなしの１語で綴られている。他方，air-base, air-fleet, airforce, air-raidは２語で書かれるのが普通となっている。また，air-pilotは昔と違ってpilotだけで通用するようになった。

（２）N1がN2により修飾されるもの
例）gold leaf（金箔）
MacDonald（人名）（マクドナルド）

midnight(真夜中)
tiptoe(つま先)

以上の例はあるものの,「N1が主要語に,N2が限定詞になる」というこのタイプの複合語は英語では極めてまれである。ちなみに,MacDonaldはスコットランド系またはアイルランド系の姓で,Macはゲール語(Gaelic)に由来し,息子の意味。従って,MacDonaldは複合語で「ドナルドの息子」(son of Donald)のことだ。

(3)連結複合語(copulative compound)

連結複合語とはN1とN2が対等の関係でandで結べるような合成語のことで,英語では少なく,国名や地名に見られることがある。

例) Austria-Hungary(国名)
(オーストリア-ハンガリー)
Alsace-Lorraine(地名)
(アルザス-ロレーヌ)
actor-director(俳優兼監督)
fighter-bomber(戦闘爆撃機)

(4)同格複合語(appositional compound)

同格複合語とはN1とN2が同格の関係で結ばれている合成語のことである。

例)courtyard(中庭)
pathway(小道)
queen mother(王子の母である女王)
subject matter(主題)

これらの中で,courtyard, pathway, subject matterは同義語を繋げたもので,類語反復的複合語(tautological compound)とも呼ばれる。なお,queen motherについては(1)に属するという見方もできる。

(5)多財釈複合名詞(bahuvrihi compound)

多財釈複合名詞(bahuvrihi compound)はサンスクリット語の文法で使われる用語で,英語では所有複合語(possessive compound)とも呼ばれている。これは外心複合語(exocentric compound)に属するもので,人や物のある顕著な特徴をとらえて間接的に表現した合成語である。

例)bonehead(愚か者)
butterfingers(物をよく落とす人)
featherbrain(軽薄な人)
hunchback(猫背の人)

(6)語群複合語(group compound)

語群複合語とは,二つの名詞が前置詞あるいは接続詞で結ばれ要素の語順が固定化したもので,きまり文句のようなものである。ハイフンでつながっている例が多く見られる。

例)boom-and-bust
(好景気と不景気の交替)
mother-of-pearl(真珠層)
jack-o'-lantern(カボチャ提灯)
son-in-law(娘の夫)

以上の分類で問題なのは,(1)以外はどちらかと言えば特異なタイプで,さらに複合語「名詞+名詞」型を整理するには(1)の細分化が必要になるということである。

3. Quirk, *et al.*による分類

複合名詞の中で第1要素と第2要素がともに名詞から構成される「N1+N2」型は,構成要素に動詞がないことから,「動詞なし複合語」(verbless compound)という呼称もある。要素間の意味関係を明確にする動詞がないため多様な意味関係が可能となり,網羅的な分類が極めて困難となる。Quirk, *et al.*(1972)では,要素間の関係に注目して「N1+N2」型の複合語を以下のように分類している。なお,用例の括弧内の英語はN1とN2の関係を示している。

(1)N1がN2の原動力となるもの

例)air gun「空気銃」

（The gun uses air pressure for shooting.）
sound effect「音響効果」
（The sound causes an effect.）
steamboat「蒸気船」
（The boat is powered by steam.）
windmill「風車」
（The wind powers the mill.）

（２）N2がN1を生み出すもの
例）oil well「油井」
（The well yields oil.）
power plant「発電所」
（The plant produces electric power.）
sugar beet「甜菜」
（The beet produces sugar.）
toy factory「玩具工場」
（The factory produces toys.）

（３）N1がN2を生み出すもの
例）bloodstain「血痕」
（The blood produces stains.）
beet sugar「甜菜糖」
（The beet produces sugar.）
car exhaust「排気ガス」
（The car gives out exhaust gas.）
headache「頭痛」
（The head causes an ache.）
sawdust「大鋸屑」
（The saw generates wooden dust.）

（４）N1がN2を保持するもの
N2がN1の一部となるもので，所属の意味が加わる。N1は無生名詞（inanimate noun）である。
例）car bomb「自動車爆弾」
（The car has a bomb hidden inside.）
doorknob「ドアの取っ手」
（The door has a knob.）
table top「卓上」
（The table has a top.）
telephone receiver「受話器」
（The telephone has a receiver.）

（５）N1がN2の特異性（種類・性別）に言及するもの
例）girlfriend「女友だち」
（The friend is a girl.）
lamppost「街灯柱」
（The post is a lamp.）
student teacher「教育実習生」
（The teacher is a student.）
studio apartment（米）
「ワンルームマンション」
（The apartment is a studio.）

（６）N1がN2の様態・性質を表すもの
例）frogman「潜水夫」
（The man is like a frog.）
goldfish「金魚」
（The fish is like gold.）
rainbow nation「南アフリカ」
（The nation is colorful like a rainbow.）
snail mail
「（電子メールに対する）普通の郵便」
（The mail is slow like a snail.）

（７）N1がN2の原料・材質となるもの
例）apple pie「アップルパイ」
（The pie contains apple.）
cardboard「厚紙」
（The board is made of card.）
gold medal「金メダル」
（The medal contains gold.）
snowflake「雪片」
（The flake consists of snow.）

（８）N2がN1の目的・用途となるもの
例）ashtray「灰皿」
（The tray is for ash.）

butter knife「バターナイフ」
(The knife is for cutting butter.)
car ferry「カーフェリー」
(The ferry is for carrying cars.)
snack bar「スナックバー」
(The bar is for snacks.)

以上の中で造語能力が高いのは,(4),(6),(8)のタイプである。

多財釈複合名詞(bahuvrihi compound)については,Quirk, *et al.*(1972)は動詞のない複合語を分類した後に取り上げている。これはN1がN2のある特定の目立った性質に焦点を当てて,全体として特殊な意味を持つようになった合成語である。

例)egghead「インテリ」
(a person who has a head like an egg)
paperback「ペーパーバック」
(a book which has a paper back)
pot-belly(米)「だるまストーブ」
(a stove which has a large, rounded chamber like a belly)

Quirk, *et al.*(1972)では「名詞+名詞」複合語を「動詞なし複合語」として分類しており,darkroom(暗室)のようなN1が形容詞となるタイプも含まれている。

一方,ここで触れられていないタイプとして,(4)とは逆の順番に要素が配置された複合語もある。つまり,N2がN1を保持するものだ。N1がN2の一部となっているとも言える。

例)armchair「肘掛け椅子」
(The chair has two arms.)
bedroom「寝室」
(The room has beds.)
keyboard「鍵盤」
(The board has keys.)
rainforest「熱帯雨林」
(The forest has a lot of rain.)

要素間の関係についてはcellphone(携帯電話)のような特殊なものもあり,まだまだ分類としては不十分である。例えば,Downing(1977)では11タイプの意味関係を提示している。Quirk, *et al.*(1985)でも若干変更した分類を載せているが,それにより複合語が分かりやすく整理されたわけではない。

4. N1が複数形となる例

複合語「名詞+名詞」型における第1要素は,たとえそこに複数の概念があっても単数形とすべきだという文法規則が英語にはある。これは複合語が登場した時代に屈折語尾の付かない語幹がN1となっていたことに由来する。さらに,複数名詞の属格として付いていたN1の屈折語尾が脱落し,N1が単数名詞の主格形と同じになってしまったケースもある。だから今日では文法規則として複合語の第1要素には複数形は用いないことになっている。これらの点については,Jespersen(1914)第2巻の第7章で「複合語第1要素における数の取り扱い」という節を設けて説明されている。そこではさらに,第1要素が数詞で修飾されていても単数形が使われるとして,two-horse carriage(二頭立ての四輪馬車),three-volume novels(全3巻の小説),five-act tragedy(全5幕の悲劇)などの例を挙げている。なお,ここの「単数形」とは,文法上の数に関して中立の形を取るという意味である。

一方,第7章の次の節では,複合語の第1要素が複数形になるケースを取り上げている。Jespersenは,複合語の第1要素と第2要素の間の結束が弱まる時に第1要素を複数形のまま用いる傾向があると述べている。具体的な例として,次の5つの単語の場合が指摘されている。

（1）通常は複数形で用いる単語

第１要素の単語にそもそも対応する単数形が存在しないか，あってもまれな場合である。

例）backwoodsman（辺境の住人）
glasses case（眼鏡ケース）
overseas trip（海外旅行）
trousers pocket（ズボンのポケット）

（2）感覚的に複数とは思えない単語

第１要素の複数形がより高度な状態へレベルアップし，語幹に融合したと見なされる場合である。

例）data processing（データ処理）
diceplay（さいころ遊び）
gallows bird（極悪人）
painstaking（苦心）

（3）単数形とは区別されるべき単語

第１要素の形ないし意味，あるいはその両面で単数形とは異なる場合である。

例）clothes store（衣料品店）
customs officer（税関検査官）
mice poison（ネズミ殺し）
honours degree（英）（優等卒業学位）

（4）単数形だと意味が不明確となるため複数形にする単語

単数形だと形容詞の意味に取られてしまうのを防ぐために第１要素の複数形が必要となる。ただし，文脈から意味が明確であれば単数形でも問題はない。

例）goods train（英）（貨物列車）
cf. good train（すぐれた列車）
plainsman（平原の住民）
cf. plain man（普通の人）
savings account（預金口座）
cf. saving account（穴埋め口座）
seconds hand（秒針）
cf. second hand（中古）

（5）第１要素が複数形となるその他の例

第１要素での複数形の使用は増加傾向にあり，特に長めの公式名称でよく見かけられる。複合語としての結束がいくぶん弱く，単数形のままになることもある。

例）Contagious Diseases Acts
（伝染病条例）
United States government
（合衆国政府）
Women's Rights movement
（女性の権利運動）
wild oats special plea
（若気の至り特別配慮の訴え）
parcel(s) post（小包郵便）

５．N1が属格形となる例

「N1＋N2」型の複合語で，N1に属格語尾-sが付いたものが存在する。属格（genitive case）は英文法で所有格（possessive case）と呼ばれることが一般的で，通常は名詞にアポストロフィーを付けた語形となる。第１要素が属格形となる複合語は，句の語彙化と見なすべきもので，特異な意味と結びついている。

（1） Adam's apple（喉仏）
bachelor's degree（学士号）
cat's eye（夜間反射装置）
razor's edge（危機的な状況）

これらの例は属格複合語（genitive compound）に相当するもので，複合語の第１要素に属格語尾-sが付いていることから見分けがつき易い。

第１要素が属格の複合語は，N1とN2の結合が弱く，単数と複数の属格が混在したり，属格のアポストロフィーが脱落したりすることがある。

（2） woman's right(s)（女性の権利）
women's rights
three-months' trip（三ヶ月の旅行）

ten minutes chat（十分のお喋り）

第１要素が単数属格となる句の語彙化が不完全で，次のような３形態が混在しているケースも見られる。

（３） girl's school（女学校）
girls' school
girls school

Jespersen（1914）には，複数形のwomenよりも単数形のwomanの方が単語として力強さと気高さがあるためwomen's collegeよりもwoman's collegeの方が好まれるとする見解が紹介されている。しかしながら今日では，論理的に複数の女性を意識していることからwomen's collegeの方が普通の表現となっている。

複数形の場合は，アポストロフィーがあってもなくても発音上は同じなため，第１要素のアポストロフィーが脱落する傾向がある。Jespersen（1914）では，綴り方においてアポストロフィーの有無にしばしば迷いが生じていると思われる例がいくつか挙げられている。

（４） two miles distance（２マイルの距離）
a few days residence（数日の滞在）
five years' child（五歳の子供）
Hundred Years' War（百年戦争）

６．まとめ

本論では，「名詞＋名詞」複合語を取り上げて，その分類方法の可能性について考察してきた。名詞を並べて複合語にする傾向は現代英語の特徴であるが，それが可能になった要因としては名詞の格変化を示す屈折語尾が中期英語で衰退したことが大きいと言えよう。複数を示す形態素が複合語の第１要素に出現する例もあるが，第１要素には何も付けないというのが英文法の規則である。例えば，単数形だと形容詞の意味に取られてしまう恐れがあるため「時計の秒針」であればseconds handと第１要素を複数形にするという考えがある一方で，第１要素は文法的に中立であるべきだという概念からhour hand（時針）やminute had（分針）と同様にsecond hand（秒針）でも第１要素に何も付けない形が辞書には載っている。複合名詞のN1とＮ２の関係は複雑で，このタイプの複合語の分類には限界があるものの，結びつきの特徴をとらえた分類は複合語の概念を整理するのに有効である。今後さらに，英語学習者の視点からどのような分類が分かりやすいのか検討する必要がある。

参考文献

Acquvavia, P. 2008. *Lexical Plurals: A Morphosemantic Approach*. Oxford University Press.

Araki, K. and M. Yasui.（荒木一雄・安井稔［編］）. 1992.『現代英文法辞典』. 三省堂.

Carstairs-McCarthy, A. 2002. *An Introduction to English Morphology*. Edinburgh University Press.

Don, J. 2014. *Morphological Theory and the Morphology of English*. Edinburgh University Press.

Downing, A., and P. Locke. 2006. *English Grammar: A University Course*. 2nd edn. Routledge. pp. 440－2.

Downing, P. 1977. "On the creation and use of English compound nouns."*Language: Journal of the Linguistic Society of America* #53. Waverly Press.

Hamawand, Z. 2011. *Morphology in English: Word Formation in Cognitive Grammar*. Continuum International Publishing Group.

Inoue, K.（井上和子）, H. Yamada（山田洋）, T. Kono（河野武）, and H. Narita（成田一）1985.『名詞』（現代の英文法）. 研究社.

Ishibashi, K.（石橋幸太郎［他編］）1973.『現代英語学辞典』. 成美堂.

Jespersen, O. 1914. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part II. George Allen & Unwin.

Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar on*

Historical Principles. Part VI. George Allen & Unwin.
Katamba, F. 1993. *Morphology*. Macmillan Press.
Katamba, F. 2005. *English Words*. 2nd edn. Routledge.
Levi, J. N. 1978. *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*. Academic Press.
Lieber, R. 2010. *Introducing Morphology*. Cambridge University Press.
Murrary, J. A., H. Bradley, W. A. Craigie and C. T. Onions (eds.). 1993. OED = *The Oxford English Dictionary*. Clarendon Press.
Nakajima, F.（中島文雄［編］）. 1970.『岩波英和大辞典』. 岩波書店.
Namiki, T.（竝木崇康）. 1985.『語形成』（新英文法選書　第２巻）. 大修館書店.
Oishi, T.（大石強）. 1988.『形態論』（現代の英語学シリーズ４）. 開拓社.
Otsuka, T.（大塚高信［編］）. 1959.『新英文法辞典』. 三省堂.
Plag, I. 2003. *Word-Formation in English*. Cambridge University Press.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
Selkirk, E. O. 1982. *The Syntax of Words*. Linguistic Inquiry Monograph #7. MIT Press.
Shimamura, R.（島村礼子）. 1986. "Lexicalization of syntactic phrases." *English Linguistics* 3. pp. 20－37.
Sweet, H. 1892-98. *A New English Grammar: Logical and Historical*. 2 vols. Clarendon Press.
Takebayashi, S. and M. Sakurai. 1985.『音韻・形態』（英語の演習　第１巻）. 大修館書店.
Terasawa, Y.（寺澤芳雄［編］）. 2002.『英語学要語辞典』. 研究社.
Watanuki, Y.（綿貫陽）and M. Peterson. 2006.『表現のための実践ロイヤル英文法』. 旺文社. pp. 343－5.
Williams, Edwin. 1981. "On the Notions 'Lexically Related'and'Head of a Word'." *Linguistic Inquiry* 12. pp. 245－74.
Yasui, M.（安井稔［編］）. 1996.『コンサイス英文法辞典』. 三省堂.